

夜須高原スマイルライフキャンプ

1 趣 旨

ひとり親家庭の生活の向上や安心に寄与するため、保護者同士で子育てに関する不安や悩みを共有し、互いに学び合い、ネットワークづくりを行う。また、様々な自然体験活動・生活体験活動を通して、親子間や子ども同士のコミュニケーションを深め、子どもの自立心や協調性、自己肯定感、チャレンジ精神等の向上を図る。

2 主 催

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立夜須高原青少年自然の家

3 連携先

北九州市母子寡婦福祉会（ルックひまわり）

4 協 力

北九州市E S D協議会
私たちの未来環境プロジェクト

5 期 日

令和元年10月19日（土）～10月20日（日）〈1泊2日〉

6 会 場

国立夜須高原青少年自然の家 飯塚市サンビレッジ茜（人工芝スキー場）

7 対 象

北九州母子寡婦福祉会（ルックひまわり）会員 *親子で参加（50名）

8 参加者 37名

15家族34名 北九州母子寡婦福祉会3名
（法人ボランティア1名 学生ボランティア3名）

9 日 程

○10月19日（土）

（午前）出会いのつどい、星と夜景の丘ハイキング

（午後）昆虫探し、林間ボブスレー、テント設営、ススキのふくろう作り

○10月20日（日）

（午前）ホットサンドづくり、人工芝スキー体験

（午後）ふりかえり～感想文（母子寡婦福祉会）・アンケート（機構本部）、別れのつどい



10 活動の実際



【出会いのつどい】



【星と夜景の丘ハイキング】



【昆虫探し】



【林間ボブスレー】



【テント設営】



【スキのふくろう作り】



【テント撤収】



【活動場所のお掃除】



【ホットサンド作り（朝食）】



【いただきます！のかけ声】



【人工芝スキー体験】



【お別れのつどい】

11 アンケートから

<保護者>

- 子どもからキャンプに行きたい、テントで寝たいと言われていましたが、私だけでは実現してあげることが出来なかったのが、とてもありがたかったです。
- 親子だけではできないような事をたくさん体験することができました。サポートにとっても感謝しています。
- 寝袋はイヤでした。あまり眠れなかったです。ホットサンド作りはとても良かったです。虫探しで子ども（グループ）だけで先に行くことや、テントを取りに行くこと、（昼食の）カレーを親の分まで運ぶことなどの子どもにさせる体験で、成長が見ることができました。
- 初の草スキーやボブスレーで体力的にきつかったですが、子どもと共に楽しむことができました。

<子ども>

- 短い時間だったけれども、すすきのふくろう作りに、スキーに、いろいろなことができて楽しい

キャンプになってよかったです。

○ボブスレーやスキーが楽しかったから、また参加したいです。

○テント作りのときにむずかしそうだと思っていたけど、組み方を教えてくれたので簡単にできました。

<北九州母子寡婦福祉会で回収した感想文から>

☆参加者（子ども）

ぼくは、夜須高原スマイルライフキャンプに参加して、とても楽しかったです。とくに楽しかったことは、虫とりです。バッタやカマキリなどをたくさんつかまえることができました。

うれしかったこともありました。それはシマヘビを見られたことです。一度も見たことがなかったので、とてもうれしかったです。

☆参加者（保護者）

子どもの満面の笑みが見られたことと、私の前では見せない表情も見られて、本当に幸せな気持ちになりました。いつもだったら、私が手を出して手伝うところを子どもに任せてみると、子どもはキラキラして自分で頑張っている姿を見て、成長したんだなあと感動と共に私が日頃、子どもにさせられる機会を奪っているのかなあと反省することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

12 成果

- 各活動プログラムにおけるねらいの明確化を行い、それを意識した子ども達や保護者への声かけをした結果、それぞれの活動に対する意欲づけや行動化が図られた。また、ボランティアとスタッフで事前打合せや就寝前のふりかえりを行い、不安や課題を共有して共通認識の下で参加家族と接することができた。
- 担当職員が母子寡婦福祉会の事務局に出向き、事前の打合せを行うことで企画や準備を円滑に進めることができた。
- 子どもの活動と保護者の活動を分けたプログラムを実施した結果、子どもの自立を促す機会になったり、保護者が子どもの姿を客観的に見つめる機会になったりすることができた。（アンケートの自由記述より）
- 野外ではなく体育館でのテント泊・シュラフ体験、手軽にできる野外炊飯（ホットドッグ）などのキャンプ疑似体験を行うことにより、母子家庭ではなかなかできないキャンプを安心して体験してもらう機会になった（アンケートの自由記述や感想文より）
- 子どもの就寝後、「保護者会」を実施したことにより、保護者同士の情報交換や子育ての悩み相談が行え、保護者同士のネットワークや母子寡婦福祉会事務局との関係づくりに繋がった。
- プログラムの1つにSDGsを踏まえた講座（人間と昆虫の関わり）を企画し、北九州市ESD協議会より講師を紹介していただいた。講義を経て家族で昆虫探しをした結果、とくに子ども達は大変意欲的に活動に取り組むことができた。

13 課題

- 開催日の設定（台風シーズンであり寒暖の差が大きくなる時季でもあるため、連携先である母子寡婦福祉会とも十分な協議が必要である。）
- 母子寡婦福祉会との十分な意思疎通（母子家庭の方々が、キャンプ事業においてどのような願いがあるのか、どういった活動を求めているのかを、十分な情報交換の上で活動プログラムづくりをしていく必要がある。）
- 準備や移動も含め、プログラムにゆとりのある時間配分をするように努める。
- 子どもへの気配りや他家族との交流面において不安を抱いている保護者も多いことから、支援スタッフ（ボランティア）の確保だけでなく事前の綿密な打合せが重要である。（大学との連携やボランティアとの事前研修等の実施）
- 今後も北九州市ESD協議会と連携して、参加家族にSDGsについて考えていただく講座を企画に取り入れ、ESDの理解に努めたい。